

おいしい時間 Mealtime

藤田雅史

琴音は、ひとまわりも歳の離れた妹で、私が小学五年生のときに生まれた。生まれたときは押しつぶした猿みたいな顔をしていて、産婦人科の病室ではじめて彼女と対面した私は、そのことに安堵したのをよく覚えている。

「この子、本当に女の子？」

父親に訊ねて、ばか、新生児なんてみんなこんなもんだ、と頭を小突かれた。しわしわで、赤くて、髪は薄くまばらで、本当に子猿のようだった。

あるアイドルグループは、クラスで三番目だか四、五番目だかにかわいい子を集めた、をコンセプトにしていると聞いたことがあるが、私はそれまでのどの学年においても、下から数えて三番目とか四、五番目、というのが定位置だった。（もちろんはつきりとした順位など存在しないが、教室内での容姿の序列、ヒエラルキーというのものに女子はとても敏感で、しかもその認識は無言のうちに常に共有され更新されている。）だから当時十一歳だった私は、生まれてくる妹にはぜひ私の総合的な順位をひとつでも押し上げてくれる、そんな容姿を求めている。

猿だ。大丈夫だ。私よりも下だ。

だっこしてみなよ、と母に言われておそるおそる腕を差し出し、胸に抱いた赤子を見下ろしながら、私は心のなかでこつそりと、そんなことを思っ胸をなで下ろしたのだった。

ところが、琴音と名付けられたその子猿は、またたくまに人間らしい姿形を獲得し、よく笑うようになり、「琴ちゃん、かわいいねえ」「将来は美人さんになるわあ」などと周囲の大人たちが

らちやほやされるようになった。

父親似で顎が無駄に角張り、吊り上がった細い目と低い鼻が不均衡に中央に寄っている私と違って、琴音は丸顔の母親に似て、バランスのとれた顔立ちだった。

私がいちばん気に入らなかったのは、大きな瞳と二重の瞼だ。私のは完全にそれとは正反対で、いかにも西欧人が侮蔑的に東洋人を表現するとき用いる特徴、という感じの一重瞼の細い小さな目。

姉妹を見比べた誰もが、まず、妹を見た。人間の視線というのは正直で、見たいものは真っ先に注目し、逆に見たくないものからは確実に、しかも無意識に目を背ける。

「え、ほんとに姉妹なの？」

とあからさまに言われたことも一度や二度ではなかった。私ですら、自分たち姉妹の父親は本当に同じ人物なのだろうかと言っただけだった。

琴音はかわいかった。美しかった。例えではなく本当に、人形のようにだった。朝、母親の助けを借りて着替えをするときの彼女は、着せ替えられている、といってもよかった。

当然、妹は男たちの目をひいた。中学に上がっても、高校生になっても、同級生の男子から恋愛対象としてはまったく相手にされなかった私は、幼稚園児にして男の子からモテまくる琴音が憎たらしくてしょうがなかった。

大人げない、とは思いますが、十代の私だってまだ子どもだった。思春期の子どもだった。ひとまわりも年下とはいえ、二人並んで妹ばかりが「かわいいね」「すごい美人だね」と言われ続け、私は従者とか保護者みたいな役回りでいつづける。それは苦痛でしかなかった。

琴音はその容姿だけではなく、性格もバランスがとれていた。素直でやさしくて、誰とでも仲良くなれる。かわいいのに、女同士で敵をつくらない。無邪気に笑い、まじめに大人のいうことを

聞く。そのことが私を二重に苦しめた。

見た目のことはもうあきらめて性格美人で売っていかう、というセルフプロデュースに取り組みはじめていた私であったものの、そこでまた妹と同じ土俵に立っては、自分のみじめさがさらに浮き彫りになってしまう。

いまならば、べつにそんなことはない、心配しなくていいのに、と思うけれど、思春期の私は思い込みが激しく、そして頑なだった。「かわいい」と「性格がいい」の他に残された道は、「勉強ができる」「センスがいい」「スポーツができる」のいずれかだった。高校時代の私は、消去法で、ひたすら女子バスケットボール部の活動に打ち込んだ。髪を短くして、大声を出して、汗まみれでボールを追いかけ回した。三年の夏まで、ほとんど毎日をジャージで過ごした。

部活を引退してからは、街に出てふらふらすることが多くなった。家に帰るのが遅くなり、親に対して反抗的になった。

ときどき、私は琴音に意地悪をした。

わざと玄関の靴を踏みつけて汚したり、彼女が大切にしていたカラーペンのセットから一色だけを抜いてこっそり捨てたり。

高校生にもなつてほんとに器の小さい女だ、といまは恥ずかしく思うが、当時はそれが私の唯一の欲望のはけ口だった。罰を与えているような気持ちだった。美しいことは罪であり、そういう人間は、そうではない人間からの恨みを買ひ、やっかみを受け入れなければならぬ義務がある、とでもいうふうに。

意地悪をされた琴音は、でも実の姉の心根を疑うことなく、

「お姉ちゃん、うさぎちゃんの赤ペンがないよう」

と本当に悲しそうな顔でそばに寄ってきた。

「えー、なくしちゃったの？」

私は何も知らないふりをして、ちゃんと片付けしないからだよ、バカじゃないの、となじり、尻を叩くなどのお仕置きをした。琴音が目に涙をためるのを見て、心の底で笑った。世の中は

甘くないんだよ、とか呟きながら。

だから、そんな私と琴音は、けっして仲良し姉妹などではなかった。一緒に暮らしたのは私が高校を卒業するまでの七年間だけ。実家から電車で一時間ほど離れた専門学校に進路を決めた私は、入学と同時に、琴音から逃げるように家を出てひとり暮らしをはじめた。

専門学生になった私は、見知らぬ人たちと友達になることを覚え、はじめて恋人ができたり、アルバイトに夢中になったりして、器量のよしあしだけが世の中の人間の価値ではないことを知った。二十歳を過ぎると、妹と顔を合わせることも比較されることもほとんどなくなり、彼女への憎しみはだいぶ薄れていった。

専門学校を卒業後、就職した編集プロダクションでずっとオペレーターの仕事を続け、そして私は気づけば三九歳のデザイナーになっていった。名刺にはチーフという肩書きもついている。何人か部下がいて、彼らを教育指導する立場にもある。

結婚はしていない。こんな私でも、彼氏がいたことは学生時代も含めて四回あった。でも、それが結婚に至ることはなかった。

私は、付き合った男が最終的に本気で自分のことを好きになってくれる、と信じることができなかった。だから、結婚願望がある女と思われないように、ずっとサバサバしたクールな自分を演じてきた。男に頼らなくても生きていける女。周囲からそう思われるよう自分を仕向けることで、誰からもプロポーズしてもらえない女、という現実のみじめさを回避できた。

でも、本当のことをいえば、ただ単純に、私は相手の男に妹を紹介したくなかっただけかもしれない。琴音と顔を合わせた男は、おそらく十人が十人、私とのギャップに目を見張り、次の瞬間、こう思うに違いないのだ。

「ああ、妹のほうが全然いいな……」

結婚相手にそんなふうに思われながら、結婚生活を一生続ける自信がなかった。もう暗黒の高校時代に戻るのはいやだった。で

できれば先に琴音が結婚してくれればいい。そうして、きつさと別の名字の、別の家の人間になってもらいたかった。

そんな妹から、ある日、昼ご飯に誘われた。

「なにそれ、琴ちゃん、珍しいじゃん」

「たまには二人でどうかなって思っただけ」

電話の向こうで琴音は、仕事の出向先が偶然、私の勤めている会社のすぐ近くの店と言った。

「出向？ あんた、仕事いま何やってんの？」

「SEだよ」

「へー、意外。そんなんやってんだ」

「一週間だけの出向なんだけど、そのあいだにどう？」

「来週は忙しいんだよなあ。×切が。まあ別にいいけどさ」

四十間近にもなあって、琴音が相手だと、自然と上から目線の、もったいつけたような態度に出してしまう私は、高校生のときから人間がちつとも成長していない。

「よかった。ありがとう。お姉ちゃん、何食べたい？」

妹のことなので、きつと雑誌で特集されるようなお洒落な店のランチコースを予約して、小綺麗な服で来るのだろう。そして店の入口で名を告げるところから、私は彼女と比較され、同じ両親から生まれ同じ血を受け継いだ姉妹ではなく、新入社員の女の子と意地悪な女上司みたいな関係で周囲から見られるのだろう。結局はまた、私ばかりが恥ずかしい思いをする。そんな光景が頭に浮かんだ。自意識過剰はわかっている。でも止められなかった。私はまた、妹に意地悪がしたくなった。

「じゃあさ、店は私が決めちゃっていい？」

「あ、うん、全然いいよ。ありがとう」

「なんでもいい？」

「お姉ちゃんの食べたいのでもいいよ」

そして私が妹を連れて行ったのは、駅前の牛丼屋だった。

え、ここ？と目を丸くする妹を尻目に、私はさつきとドアを開け、券売機で食券を買った。

「ほら、さつきと決めないと後ろに列できるよ」

「こういうところに入ったことないから、よくわからないんだけど、なにかオススメとかある？」

「んなもんじゃないよ。牛丼屋なんだから牛丼食つとけ」

「どれ押せばいいのかな」

「並にしとけ。二九〇円の。おごつてやるから」

「え、に、二九〇円…？」

「いちいちカルチャーショック受けんなよ。ほら、混んでくるから早く」

私たちはカウンターの奥の席に並んで座った。無言のバイト店員によつて、水、味噌汁、コールスロー、そして喫茶店のコーヒー一杯よりも安い牛丼がすぐに運ばれてきた。

「お姉ちゃん、こういうところよく来るの？」

「しょつちゆうだよ。早いし安いしうまいから」

品のいいツイードのロングスカートに、光沢のある薄いシルクのカーデイガン。控えめなフラワーパールのブローチ。艶のある茶色のショートボブはゆるふわな感じにパーマがかかって、誰が見ても綺麗だった。私の妹は、二九〇円の牛丼が似合うような女ではなかった。新品とおぼしきブランドもののショルダーバッグをどこに置いたらいいか（どこがいちばん衛生的か）迷って、仕方なく膝の上に置いていた。そのとき、それが取引先で仕事をする格好ではないと私は気づくべきだった。でも、SEというのは内勤だろうし服装はけっこう自由なのかな、と思ってスルーしてしまった。

「彼氏とかに連れて来られたことないの？」

「うん、ラーメンならよく行くんだけど」

「牛丼もうまいよ、たまに食うと」

「いただきます」

「あ、紅シヨウガこれ」

何か相談事でもあるのか、あるいはもう二七歳なので、婚約したとか結婚式の日取りがどうか、そんな報告があるのかとあらかじめ予想し、身構えていたものの、琴音は特に何かを切り出す、という感じではなかった。いささか拍子抜けだった。

「お姉ちゃん、最近どう？ あんま実家帰ってこないけど」

「どうこうもないよ。忙しいんだって仕事」

「身体、気をつけてね」

「わかってるよ。そういやお母さん、元気？」

「腰が痛いって言ってるけど、まあまあ、普通に元気だよ。お父さんは再来年が定年だから、ふたりで退職金の話ばっかしてる。お父さんは車買い替えたいんだけど、お母さんは旅行したいんだって」

「あー、そうだね、もうそんな歳だね、ふたりとも」

実家暮らしの琴音から両親の様子を聞いたり、親戚や知り合いの話をしているうちに、二人ともあつというまに牛丼を食べ終えた。店に入ってから二十分もかかっていなかった。

「じゃあ、私、仕事あるから戻るわ」

「お姉ちゃん」

「ん」

「忙しいのにとありがとう。おいしかったよ、牛丼」

「だろー。うまいんだよ」

店の前で私たちは別れた。会社の方に歩き出して、ふと振り向くと、琴音はまだ店の前に突っ立って私の姿を見送っていた。目が合うと、穏やかな表情で手を振った。大人になった琴音の、その立ち姿はやはり美しかった。

私は、手を振り返さずに、再び背を向けた。仕事のメ切は、息を吐く暇もないほど次から次へとやってくる。着古したパーカーのポケットに手をつっこんで、会社に急いだ。肌寒い秋の昼時だった。強い風が吹いていた。引き返して、ひとこと訊ねればよか

った。琴ちゃん、何か私に用あったの？と。

あのとすでに琴音が余命わずかだったと知らされたのは、彼女がこの世からいなくなっただけからだ。

私に心配をかけさせたくないからと、琴音は病気を私に隠すよう、両親にきつく釘を刺していたらしい。実家に帰らず、電話をすることも滅多にない私は、だから何も知らなかった。

結局、あの牛井屋でのわずかな時間が、私と妹のふたりきりの最後の時間になった。仕事の出向先が近くだから、というのほもちろん嘘で、琴音はわざわざ私に会いに来てくれたのだった。

彼女が胸につけていたフラワーパールのブローチは、まだ小さかったとき、家族で旅行した高原で私が妹に摘んでやったのと同じ花を象ったものだそう。私にはそんな記憶などまったくなかったが、琴音はそのことがよほど嬉しかったらしく、ネットですの花を模したブローチを探して、私に会うためにわざわざ買ったのだという。通夜の夜、母がみんな教えてくれた。

あの日は、琴音が自分の好きなものを自由に食べられる最後の日だった。翌日からは食事が制限された。投薬の副作用で食べ物を口に運ぶことすら苦痛になる、そんなきつい治療がはじまる直前だった。

琴音の危篤を知らされてから、私はずっと混乱のなかにいる。

たったひとりの妹のために、私は何もできなかった。病気を知らせてもらうことすらできなかった。ただかわいいからという理由だけで妹を避け、そこから遠くに離れることで自分の居場所を見つめようとしてきたこれまでの自分の人生が、恐ろしいほど無意味なものに思えて仕方なかった。後悔しかなかった。

琴音なんていなくなればいいのに。生まれてこなければよかったのに。そう思ったことは、これまで何度もあった。数え切れないほどあった。だけど、本当にいなくなるなんて、想像したこともなかった。

あるとき、私は不意に思い出した。まだ十一歳の、ひとりっ子だった私が、母の大きなお腹をそつとなでながら感じていたこと。母と話していたこと。

「この子が生まれたら、あんたはお姉ちゃんだからね」

「うん、わかってるよ」

「かわいがって、お世話してくれる？」

「するよ。当たり前じゃん。だって私の妹だもん。ねえ、どんな名前にするの？」

「いま、お父さんが考えてくれてるから」

「呼びやすい名前がいいよ」

「妹が生まれるの、楽しみ？」

「うん。一緒に遊んで、一緒におやつ食べて、勉強も教えてあげる。男の子にいじめられたら助けてあげる」

「そうね、楽しみだね」

どうして、そうならなかったんだろう。なんで生まれたとき、猿みたいでよかった、なんて思っちゃったんだろう。仲良くすればきつと楽しかったのに。かわいい妹でしようって、自分からまわりの人たちに自慢すればよかったのに。なんでそんなこともできなかつたんだ。私はどれだけダメな人間なんだ。

私は最近、胸のなかで妹に語りかける。

琴ちゃん、ごめん。私のせいでせつかくのランチを台無しにしちゃった。琴ちゃんの好きなものを食べさせてあげればよかったよ。なんであんな意地悪しっちゃったんだろう。私、ずっと琴ちゃんに嫉妬してた。かわいい琴ちゃんが苦手だった。でも、本当はちつとも嫌いじゃなかった。ていうか、本当は琴ちゃんに、私のそばにいて欲しかったんだ。琴ちゃんに、私の大切な妹でいて欲しかったんだ。でもかわいい琴ちゃんは、きつと、私なんかよりも一緒にいて楽しいほかの友達とか、男の子とかの方がいいに決まってる。全然かわいくない私は、琴ちゃんにいつか馬鹿にされるようになる。私はきつと、そのことが悔しかったんだ。誰かに

取られるのが悲しかったんだ。そんなつらい気持ちになるくらいなら、最初から、私が琴ちゃんから離れちゃえばいいって無意識に感じたんだと思う。嫌いになれば、傷つかなくていいって思ってたんだと思う。私、自分に自信がないんだ。ずっとずっと、小さいときから今の今まで。本当はね、自分に妹が生まれるって知ったとき、すごく嬉しかった。自分が強くなれる気がした。なのにね。私、まったく正反対のこととしてた。琴ちゃんが生まれてから死ぬまでずっと。琴ちゃんにとっては、一生、嫌なお姉ちゃんだったよね。ねえ、病気のこと、教えてよ。水くさいじゃん。私に何もさせてくれないなんてひどい。私にできることなんて何もないのはわかってるけど、でもせめて、琴ちゃんに、これまでのこと謝るくらいはさせてほしかった。土下座でもなんでもしたのに。本当は好きだったって、言いたかった。気づいて欲しかった。知って欲しかった。

そんな想いが、天国の妹に通じたのかどうかはわからない。

あるとき、不思議なことが起こった。もしかしたらそれはただの私の妄想かも知れないし、白昼夢のようなものかもしれない。現実では満たせなかったことを、空想のなかで満たしたのかもしれない。だけど私は確かな自分の記憶として、その映像を思い起こすことができる。

琴ちゃんが死んでから半年くらい経ったある夜のことだ。あの駅前の牛丼屋で、私は残業帰りに牛丼をかきこんでいた。コールスローのキャベツをつまみ、味噌汁をずるずる喉に流し込んで、いつものように晩飯を簡単に済ませようとしていた。

カウンターのテーブルに置いたスマホに、メールの着信があった。てつきり仕事の連絡だと思った。あー、面倒くさい。無視しようかなと思いつながら、でも余計なストレスを翌日にまわすよりは今見て処理しておこうとメールを開いた。

〈お姉ちゃん、こないだはありがとう〉

そんな書き出しだった。長いメールだった。私はもちろん自分の目を疑ったし、精神状態も疑った。何度も目をこすった。深呼吸もした。心を落ち着けてリセットするために水を飲んだ。でもやっぱり、そのメールの書き出しは〈お姉ちゃん〉だった。

〈牛丼、おいしかったよ。世の中にはこんなに安くておいしいものもあるんだね。それを知ることができて、よかったです。でも私がいちばんよかったと思うのは、お姉ちゃんのことをほんの少しでも知ることができたこと。お姉ちゃんの好きなものを一緒に食べられたこと。〉

〈あれからは、治療のせいで食欲とか全然わかなくて、せっかく食べても苦しくて戻しちゃうことも多くて、本当に食事がつまらなかった。最後のほうはね、もうお父さんとお母さんを喜ばせるためだけに食べ物を口に運んだ。私、お姉ちゃんと最後に牛丼食べられてよかったよ。あれを宝物にして、残りの時間を生きたよ。おいしいって、幸せだよね。〉

〈ねえお姉ちゃん、お姉ちゃんがどんなふうに思っているか、私はお姉ちゃんのことを好きだよ。あんまり一緒にいれなかったけど、私はずっとお姉ちゃんに好かれたくてしかたなかった。お姉ちゃんに、もっとかわいがってもらいたかった。遊んでもらいたかった。〉

あれれ、今日の牛丼はやけにしょっぱい味がすると思ったら、それは涙の味だった。私は泣いていた。周囲のサラリーマンにじろじろと見られていた。バイトの店員は困った顔をしていた。あまりにも恥ずかしいので、私は牛丼を半分残して店を出た。

おもてでメールの続きを読もうと、駅前広場のベンチに腰を下ろし、スマホの受信トレイを開いたら、でも、そのメールはもう

どこにもなかった。ゴミ箱フォルダも、削除済みフォルダも、全部見たけれど、どこにもなかった。

本当に不思議な出来事だった。

妹に対して、何を思っても、すべてはもう遅い。私は彼女にとって最悪な姉だったし、最低な人間だった。

それでも、私は思う。これからの人生で、私が楽しいと感じたことは、みんな琴音に語って聞かせたい。おいしいと感じたものは、みんな琴音にも食べさせてあげたい。面白いことに出会ったら、どんなに他愛もないことでも、話して一緒に笑い合いたい。好きな人ができたら、琴音に紹介したい。そんなふうに、私は愛する妹を抱きしめたい。もう一度、私は人生をやり直したい。



※この作品はフィクションであり、実在の人物、団体等とはいっさい関係ありません。
※本作品に関するすべての権利は著者本人に帰属します。また、無断での複製・改変・放送・上演等は固くお断りいたします。